

「結果誘導」節における発話意図  
—主観性をめぐる—考察—

田中 寛

Function and Usage of Result-Introducing Clauses  
—A Study on “Subjectivity”—

TANAKA Hiroshi

Abstract

In accordance with pragmatics, utterances can be analyzed into three types of functions: 1. “kekka”, “sue(ni)”, “ageku(ni)” 2. “amari”, “temae”, “bakarini” 3. “karaniwa”, “ijyouwa”, “uewa”. From this point of view, the function or condition of the usage of these patterns, when it is used for asking the hearer to do something, may be defined as follows:

The main function of these patterns are to indicate some subjectivity of the speaker to realize the matter through the action of the hearer, yet the action must be voluntary or spontaneous. Therefore, these patterns can never be used for an order or command as the illocutionary act. Also, when the perlocutionary act of the utterance is considered as a request, invitation, or recommendation to the listener with immediate effect.

[キーワード] 「結果誘導」節 副詞節 主観性 発話意図

## 0. はじめに

副詞節は日本語の複文のなかでも、実に多様な構造と意味特徴を呈している。現在行われている一般的な分類にしたがえば、副詞節には原因理由節、時間節、条件節、目的節、譲歩節、程度節などがあげられるが、そのなかには従来の分類に入りにくいもの、たとえば「きり」「まま」「なり」などの中断をあらわす附帯・並列節、「につれて」などの移行・変化をあらわす後置詞を用いた副詞節など、時間節でありながら意味的には原因理由、条件的な性格も十分にみとめられるものがある。かかる事情から、副詞節の認定もさることながら、より個々の文法現象の緻密な記述研究によって、分類の基準を検討する必要もでてくる。本稿では副詞節のうち、原因理由節と時間節の双方にまたがって後件事態を導く契機節<sup>きっかけ</sup>ともいうべき誘導成分を、具体的にあらわれるいくつかの文型をとりあげながら、その意味と機能についての記述をおこなうことにする。

そもそも複文において、ある前件事態が結果としての後件事態をみちびく際に、動詞の「テ」の形を用いたものがあつた。

1) a. あなたに会えて嬉しいです。

(; あなたに会えたことが私を嬉しくさせた)

b. 手紙をもらって安心しました。

(; 手紙をもらったことが私を安心させた)

これらの言い方は、視点を変えれば括弧内に記したように前件を主格として、後件を実現たらしめる、いわば働きかけとしての特徴が見いだされる。

本稿でとりあげるのは「結果」「すえ」「あげく」「あまり」「手前」「以上」「からには」などの構文で、いわゆる複合辞と称される文型の一群である。益岡・田窪(1992:190)では原因理由を表す副詞節に含められるものであるが、ここでは「結果誘導」節という名付けのもとに、もう少し話し手の発話意図にふみこんで分類の基準を検討してみたい。とりわけ後件事態の発生にかかわる話し手の主観性の介在についてみていくことにする。

## 1. 「～結果」

語の実質的な意味での「結果」は次のように具体的対象として認識される。

- 2) a. 実験してわかった結果を報告します。  
b. 実験してわかった結果は満足のいくものではなかった。  
c. 実験してわかった結果 {に/に対して} 再度検討を加える。  
d. 実験してわかった結果よりもっと重要な問題がある。

これに対して以下であつかうものは「結果」が形式名詞の機能をおびて、句末・節末接続文型として用いられるものである<sup>注1)</sup>。まず、例文をあげる。

- 3) a. いろいろ考えた結果、やはり国に帰ることに決めた。  
b. 立って歩くようになった結果、人間の生活は大きな変化をとげるようになった。  
c. 先生と相談した結果、論文のテーマを変えることにした。  
d. 十年も研究を重ねた結果、この本を完成した。  
e. 投票の結果、知事には田中氏が再選された。  
f. 長い間苦勞に苦勞を重ねた結果、やっとこの製品を完成させた。  
g. 失敗をくりかえした結果、人間はいくらか賢くなったようだ。

「結果」のあとには何らの格助詞もつかず、もっぱら複文成立のための接続成分として参画している。接続の態様をみると、「結果」の前は動詞の完了形タ形がくるのが普通である。また主文も動詞が完了形でおわるものがほとんどである。「結果」事態の発生を意味する以上、当然のことであろう。心的な労苦をあらわすスル動詞は多く「名詞のあまり」の形をとる。

- 4) 彼は{?心配する/?心配した/心配の}あまり、寝込んでしまった。  
主文には自動詞を受けながら「ようになった」などの移行をあらわす形式、また「ことにした(決めた)」「してしまった」などの形が多用される。また、共起する副詞としては「いろいろ」「長いあいだ」など、また動詞として「繰り返す」「重ねる」「調べる」「討議する」などの反復性・継続性の強い動詞が用いられる。比較的重大な結果をもたらす意味合いから、「考える」のような思考動詞も用いられる。一方、「食べる」「買う」などの動詞は、後件において相

応の達成感や最終結論をあらわすにはやや不釣合いである。

5) ? a. がまんして歩いた結果、前方に山小屋が見えた。

? b. テレビを見た結果、目を悪くしてしまった。

また、一回性の動作行為も、この文型のもつ発話意図に反している。

6) ? a. 家に帰った結果、内部が荒らされていた。

? b. 給料をもらった結果、前月より少なくなっていた。

発見をあらわす後件の事態は、「家に帰ると」「給料をもらうと」のように条件節の「と」によってより自然に描かれる。「結果」を用いて、事態の経緯をあらわすには、前件において継続性の表示が不可欠である。

5)' a. がまんして歩き続けた結果、ようやく前方に山小屋が見えた。

b. 毎日近くでテレビを見続けた結果、とうとう目を悪くしてしまった。

後件には「ようやく」「とうとう」などの結果達成副詞が共起することからも、後件事態は達成感、達成度の大きい行為が示されるのが普通である。したがって日常一般的な行為の結果としては当然すぎることから、不自然さが残るわけである。また「増える」などの漸増をあらわす動詞はそれ自体、継続性を内包する。

7) 父性を欠いて育てられた者が増えた結果、社会の秩序が維持できないという瀬戸際に現代社会が立たされているとすることができる。(父性の復権)

品詞的な接続の特徴では動詞のほか、〈名詞の結果〉のかたちであらわされる。この名詞はいわゆる動作性名詞である。この場合、「投票」などのイベント行為は一回性のものであっても許容される。<sup>注2)</sup>

8) 投票の結果、調査の結果、審査の結果、……

一方、形容詞群はこの構文には適合しない。これは形容詞のあらわす静的事態が状態性のものであり、個々の動態的な蓄積のうえに後件事態が招来されるという性質のものではないからである。

9) ??暑かった結果、各地で水難事故があいついだ。

形容詞の場合は、次のような動詞をともなう連語的な修飾構造に拡張する必要がある。

9)' 暑い日が続いた結果、各地で水難事故があいついだ。

または、後置詞を用いて「暑い日が続く」ことを背景に、直接原因としない、次のような注釈的説明をほどこす必要がある。

9)" 暑い日が続いた{こともあって/ことも手伝って}、各地で水難事故があいついだ。

誤用としては、5) のような一般動詞を用いたもの、さらには「いろいろ考えた結果は、やはり国に帰ることに決めた」のように「は」を使う点である。「結果は」とした場合は前掲2) b. のように判断的な内容（「よかった」とか「満足のいくものであった」など）が続かなければならない。

「結果」構文のもうひとつの特徴は、結果事態にあらわれる「判明」という提示である。「ことがわかった」「のがみつかった」「のに気がついた」などが後件に見られる代表的な形式であるが、いままで分からなかった事態がある事態が終わったことによって、明らかになるという経緯をあらわしている。

10) いろいろ調べてみた結果、私の判断が間違っていることが分かった。

次のような「結果」は文末に移行したものと考えられ、事由ないし根拠をあらわす。これは倒置文の類型として「から」に置きかえられることが多い。また、このような場合「結果」は「おかげ」に置きかえても不自然にはならない。

11) これだけのいい成績が残せたのは、努力した結果(おかげ)です。

(⇒努力した結果、これだけのいい成績が残せたのだ)

(⇒努力したおかげで、これだけのいい成績が残せたのだ)

11)' これだけのいい成績が残せたのは、努力したからです。

(⇒努力したから、これだけのいい成績が残せたのだ)

次のような名詞述語の文末形式もこうした用法の変換的な類型と見なされる。

12) 91年には到着前の駅名アナウンスを2回から1回に減らすなど簡略化したが、乗車マナーなどの注意が増えてきた結果だという。

(朝日新聞2001. 2. 24.)

; ...簡略化したが、これは乗車マナーなどの注意が増えてきた結果だという。

；乗車マナーなどの注意が増えてきた結果、91年には到着前の駅名アナウンスを2回から1回に減らすなど簡略化したという。

このほか「結果」、「その結果」のように単独で冒頭において接続成分として用いられる。

13) 日本人の無計画性は、どこの国の料理でもとにかく受け入れてしまうのである。その結果、日本は文化だけでなしに、料理の面においてもふきだまりとなっている観がある。(たべものと日本人)

## 2. 「～すえ (に)」

「すえ (に)」は「結果」よりもいっそう語の意味の抽象化がすすんだもので、「末がおもいやられる」のように「将来」という意味が連語成分のなかにみとめられるほかは、一般に単独では用いられない。1. でみた接続成分の「結果」には、主として事態内部のことについての言及が見られたのが、「すえ」では広く、事態の周辺にまで状況まで言及するという心的拡張の特徴がある。これは「結果」がまだいくらか実質的な意味を残している証左といえよう。「すえ」は名詞接続の場合は「結果」と同様に、「〈名詞〉のすえ」の形となるが、動詞接続の場合は、これも夕形接続が普通である。格支配も「に」格のみで、純然たる接続成分として機能する。

- 14) a. 接戦のすえ、巨人に軍配があがった。  
b. 口論のすえ、なぐりあって怪傷をさせた。  
c. 幾日か漂流のすえに、やっと島の岸にたどりついた。  
d. 苦心のすえに、実験はやっと成功した。  
e. ぼくらのチームは決勝に進んだが、延長戦のすえ、惜しくも敗れてしまった。

「すえ」の前の名詞が受ける動詞はル形が一般的である。

- 15) a. 長期にわたる議論のすえ、入試制度が改革されることになった。  
b. 5時間にもおよぶ討議のすえ、両国は米の自由化問題について最終的合意に達した。

底名詞そのものの性質、本質をあらわすためには次のようにタ形は適している  
とはいいがたい。

16) ? 5時間にもおよんだ討議のすえ、両国は米の自由化問題について最終的  
合意に達した。

動詞タ形接続の場合は「悩み」のほか「道楽」といった行為が提示される。

17) a. 彼はさんざん道楽をしたすえに、家族にも見放されてしまった。

b. いろいろ考えた末、会社を辞めることにした。

c. 幾日も思い悩んだすえ、僕は友達に断りの手紙を書いた。

砂川他(1998)によると、「すえに」は「ある経過をたどったあとで最後に」の  
意味で使われるとしているが、事態の破綻・決裂といった評価内容については  
言及がないのは不十分さが残る。「すえ」は「結果」にくらべて次のような倒  
置文が可能である。

18) 帰国するというのは、さんざん迷った末の結論です。

cf. ??帰国するというのは、さんざん迷った結果の結論です。

しかし、何も修飾語をとまなわなない次の場合は、倒置文は不自然である。

19) ??成功したのはたゆまぬ努力のすえです。(⇒努力の結果)

なお、18)の倒置文のタイプにおいては底名詞にかかる動詞は完了のタ形であ  
ることには変わりはない。

20) \*帰国するというのは、さんざん迷う末の結論です。(⇒迷った末の)

### 3. 「～あげく (に)」

「あげく」「(に)」ははずして使うことが多い)は「挙げ句」「揚げ句」とも表  
記し、もともと連歌、俳諧の最後の句を意味したのが転じて「終わり」「果て」  
「とどのつまり」という意味を表すようになったものである。事態の最終的な  
結末を表し、前件には「いろいろ」「さんざん」「長い間」などの比較的長期間  
にわたる模索を示唆する副詞が共起する。後件には「とうとう」「ついに」な  
どの副詞が共起する。後件事態は消極的な(残念な)内容が述べられる。「結  
果」よりも「すえ」、「すえ」よりもさらに「あげく」において話し手の感情の

発露、感慨の振幅は大きくなる。名詞接続の文例をあげる。

- 21) a. 長い間の苦勞のあげく、とうとう病床に倒れてしまった。  
b. 口論のあげく、最後にはとっくみ合いになってしまった。  
c. 長時間の議論のあげく、その計画は中止になった。  
d. 悪戦苦闘のあげく、友人のつてで留守宅を借りることができた。  
e. 長期にわたる労働のあげく、ついに死んでしまった。

動詞接続についてみると、「結果」、「すえに」と同様に、「あげく」の前接部分はタ形であらわされるのが普通である。

- 22) a. 山で道に迷うと、さんざん歩き回ったあげく、寒さと疲れのために命を落とすことがある。  
b. いく日も考えに考えたあげく、この家を売り払うことにした。  
c. 彼は留学するといっては大騒ぎしたあげくに、試験に落ちてしまった。  
d. 客はさんざん難癖をつけたあげく、結局何も買わずに帰っていった。  
e. 遊びつづけたあげく、とうとう一文なしになってしまった。  
f. さんざん迷ったあげく、大学院にはいかないことにした。  
g. その男はお金に困ったあげく、銀行強盗を計画した。

a. c. e. の後件事態は自然発生的、あるいは誘発性の出来事で、主体の意志のあずかり知らぬことであるが、b. d. f. g. は主体の意志性が関与している。

文末の形態、修飾する副詞の性格など、そのほとんどが「結果」構文に類似する。「あげく」は「あげくのはてに」の形で用いられることもある。また、「あげくは」「あげくのはてに」「はては」などのように、結果を導く副詞性接続語としても機能する。

23) 勉強をしないで遊んでばかりいて、そのあげくどうなるかは通知表を見なくても分かる。

24) 男は大酒のみで怠け者、そのうえ競輪・競馬で大借金ときて、挙げ句の果ては夜逃げをしたとか。

砂川ら(1998)によれば「あげく」は「後ろに何らかの事態をあらわす表現を伴って、前で述べた状態が十分長く続いた後にそのような結末・解決・展開に



なったという意味をあらわす」とし、「その状態が続くことが精神的にかなりの負担になったり迷惑だったりするような場合」に多く用いられるという。また「挙げ句の果てに（は）」は「長い間ある状態が続き、それが限界に達したときにその結果として起こることを述べる」としている。

ここで「結果」は事態に、「すえに」「あげく」は感情に重点をおいた言い方ということができそうだが、「すえに」と「あげく」の意味的な弁別をしておくことは必要である。次の例から一般に「すえに」のほうは当初の目論見に沿った達成が獲得されるのに対し、「あげく」は予想外の、あるいはマイナスの、好ましくない事態に陥るという傾向がある。「あげくの果てはこのザマだ」のように、後件のサマには失態が呈されることが多い。

25) a. さんざん道に迷ったすえに、ヤット宿ニタドリツイタ。

b. さんざん道に迷ったあげく、トウトウ野宿ヲスルハメニナッタ。

b. の「あげくに」は「我慢にたえきれなくなって、仕方なしに」という不本意な決断が表されるとみてよい。上例のように「すえに」は「やっと」が、「あげく」は「とうとう」（しばしば「結局」「ついに」も）といった副詞が共起しやすいことも判断材料の一つになると思われる。「あげく」の方が「すえに」よりもより主観性をおびた接続形式といえよう。

#### 4. 「～あまり」

以上、「結果」、「すえに」「あげく」がどちらかといえば、主観性を介在させながら客観的な事態を記述するほうに傾いていたのに対し、以下ではもっぱら主観的な観点から記述する「結果誘導」節についてみてみよう。その代表として「あまり」をまずとりあげる。

「あまり（あんまり）」は元来、「余り」という余剰をあらわす意味が、過剰の意味を機能化して副詞として働くことが優勢になった語である。通常、

26) あの映画はあまりおもしろくなかった。

のように「それほど」「そんなに」と同類で、「ない」と呼応する、否定の類型としてあらわれるほか、「あまりに」「あまりにも」を含め、

27) a. あまり遊んでばかりいると、試験の前になっても知らないよ。

b. 予定よりあまりにも早く着いたので、誰もまだ迎えに来ていなかった。  
のように「～すぎる」の意味で用いられる。ここであつかう「あまり」を程度をあらわす形式名詞とみなし、接続成分として転成したのは、後者の意味の拡張、抽象化にほかならない。接続成分としての「あまり」は次のような例文にあらわれる。

28) a. 父は働きすぎたあまりに、病気になってしまった。

b. テレビを見続けたあまり、目が悪くなってしまった。

「あまり」は砂川ら(1998;12)によれば「感情や状態を表す名詞や動詞について、その程度が極端であることを表し、後半ではそのために起こってしまった良くない結果を述べる」としているように、原因・理由節と程度節の双方の性格をもつ。「あまり」も前の修飾語は継続性のある動作行為が前提となることでは共通している。したがって、次のような行為は継続性であっても、主観的な観点から「あまり」は適用されない。以下の例は「結果」を用いて客観的な事態とすべきであろう。

29) ? a. (長時間) パソコンを打ったあまり、肩が痛くなってしまった。

⇒(長時間) パソコンを打った結果、肩が痛くなってしまった。

? b. 雨が降り続いたあまり、川の水が氾濫しそうになった。

⇒雨が降り続いた結果、川の水が氾濫しそうになった。

「あまり」は動詞のタ形に後接する点では「結果」「すえ」「あげく」と同様である。そしてその動詞はすでに時間的な経過を経た「過剰な」意味が付与されている。補助動詞としては「すぎる」のほか、継続性アスペクトの「続ける」もあらわれる。(「続く」は一般に不自然) 一方、次のように動詞のル形に接続する場合がある。これは一般に過失(副詞「つい」と共起)の傾向をあらわす。

30) a. 急ぐあまり、大切なところを見落としてしまった。

b. 子の将来を思うあまり、つい厳しいことを意ってしまった。

形容詞、形容動詞にも接続する。この場合は現在形のみである。

31) a. 子供がかわいいあまり、親は自分を犠牲にしてまで子供をかばってしま

う。

b. 彼女は仕事が几帳面なあまり、細かくやりすぎて、かえって上司から嫌われている。

c. 小林さんは実験に熱心なあまり、昼食をとるのもしばしば忘れてしまう。これらは動詞的な意味（「子どもをかわいく思う」「仕事を几帳面にやる」「実験に熱中する」）を呈している。形容詞、形容動詞を名詞にかえて、「～のあまり」の形で用いられるものも多い。

32) くやしさのあまり、さびしさのあまり、

33) 空を飛べた嬉しさのあまり、約束を忘れ、高く高く舞い上がって行った。

ここで「あまり」に接続する名詞語彙の特徴を整理しておく、次の二つの語群が認められる。

○感情形容詞から転成した感覚などを表す名詞；悔しさ、恐ろしさ、暑さ、寒さ、痛さ、悔しさ、ひもじさ、虚しさ、寂しさ、嬉しさ、はずかしさ、…

○感情・状態を表す一部の名詞；感激、緊張、心労、疲労、空腹、勢い、喜び、恐怖、心配、怒り、腹立ち、興奮、…

同じく「あまり」を用いた形式として「あまりの〈名詞〉に」がある。砂川ら(1998;11-12)では「程度の意味を含む名詞について、『その程度が高すぎるために』という意味を表す。後半にはそれが原因で必然的に起こる結果を述べる表現が続く」と述べている。「に」は理由・原因の出处を示す。

34) a. あまりの驚きに、声も出なかった。

b. 海水浴に行ったが、あまりの人出に、ぐったり疲れてしまった。

c. あまりの問題の複雑さに、どこから解決していけばよいのか糸口さえ見つかからない。

d. 警官隊のあまりのひどさに、市民は怒りの声をあげた。

e. あまりの口臭に俊介は思わず顔をそむけた。

f. あまりの激痛に、幾度も気を失いかけた。

g. 外務省のあまりの理不尽な対応に、非難の声があがっている。

この〈名詞〉は形容詞、形容動詞の名詞形のほか、b., e., g. などの一定の過剰

さ、異常さをあらわす名詞もふくまれる。興味深いことに「～あまり」は、「あまりの～に」という副詞句への移行がしばしば見られるが、その交代性の可否条件、また意味の相関については従来の研究には説明がない。

35) a. 忙しさのあまり、つい食事をすることも忘れてしまった。

b. あまりの忙しさに、とうとう体をこわして入院する羽目になった。

36) a. 激痛のあまり、何度も顔をしかめた。

b. あまりの激痛に、幾度も気を失いかけた。

「あまりの～に」の「に」は「病気に倒れる」などの理由をあらわすことから、b. のほうにより深刻な事態が示されるようである。次のような形容詞に接続する言い方は、「かわいいあまり」は例外として、自然さに欠けるようである。

37) ??悲しいあまり、嬉しいあまり、暑いあまり、痛いあまり、ひどいあまり、

.....、嬉しさのあまり、暑さのあまり、痛さのあまり、ひどさのあまり、

これらはすべて「悲しさのあまり」か、「あまりの悲しさに」の形で、つまり名詞形として用いられるものである。「あまりの」のあとは感情形容詞、感情形容動詞の名詞形、または感情をあらわす動詞の連用形語幹である。

ただし、次のような例では言い換えができない。

38) a. {あまりの人出に/??人出のあまり}車を駐める場所もない。

b. {勢いのあまり（；勢いあまって）/?あまりの勢いに}土俵下に転落。

c. 彼女は子どもをなくして{あまりの悲しさに/?悲しさのあまり}病気になってしまった。

d. 合格した{あまりのうれしさに/?うれしさのあまりに}か夕べはよく眠れなかった。

「あまりの名詞」は38) d. のように「か」を付して、背景の推量をあらわすこともある。

## 5. 「～手前」

「手前」は「手元」の意味から、「他人に対する自分の立場、面目」あるいは

「他人や周囲、世間に対する体裁」を意味し、これが接続成分となったものである。「のだから」という前提の差出しに近いが、感情的な趣きが強い。したがって、後件主文には回避できない、適応づらい行為が示される。おおかたは進退きわまる状況である。

- 39) a. 友人の手前、頼まれたらいやといえない。(友人である手前)  
b. 世間の手前、黙ってられない。  
c. 発表すると言った手前、引っ込みがつかなくなった。  
d. みんなの前でできる豪語した手前、引き下がれない。  
e. 力になろうと言った手前、いまさら断れない。  
f. お稽古事というのは、続けると自分から言い出した手前、途中でやめるわけにはいきません。

後件において共起する副詞としては、「いまさら」「いまごろになって」などがある。前件には「親友の手前」などのほか、思量なくうっかり言い出したことの行為が差し出される。発話動詞以外は不自然さが残る。

- 40) ??前日予約した手前、キャンセルするわけにはいかない。

⇒cf. 前日予約した以上、...

しかしながら、次のような幸運な、あるいは過失的な事態であれば、整合性は認められる。いずれも主文には否定的な主意事態が示される。

- 41) a. みんなに祝福されて結婚した手前、簡単に離婚などできない。  
b. 内定をもらった手前、あっさり就職を取り消すのは難しい。  
c. 会議に遅れてきた手前、席上、発言するのがためらわれた。

「手前」は現代語ではあまり見かけなくなったものの、自己主張を抑制し、周囲や体裁を重んじるという点からは日本人の言語習慣を象徴した表現形式であるともいえるだろう。「～手前もあって」のように婉曲にあらわす場合もある。

## 6. 「～ばかりに」

「ばかりに」は多義的な「ばかり」が接続成分となったもので、当該事態がもととなって、次の事態（多くが好ましくないもの）が生じたという残念さ、

被害的狀況をあらわす。

- 42) a. 少し生水を飲んだばかりに、おなかをこわしてしまった。  
b. うっかり口をすべらしたばかりに、彼を怒らせてしまった。  
c. 忠告をしたばかりに恨まれるハメになった。  
d. 彼は外国人であるばかりに、その会社の正社員になれずにいる。  
e. お金がないばかりに、こんな安アパートに住んでいる。  
(お金があったらこんな安アパートになんか住まない)  
f. 彼女に会いたいばかりに、こんなに遠くまでやってきたのです。

「ばかりに」はしばしば上述の「手前」との交替が認められる。

- 43) a. 仕事を引き受けた手前、断るわけにはいかない。〈主意志の動態〉  
b. 仕事を引き受けたばかりに、断るわけにはいかなかった。

〈事態の動態〉

ただ、若干のニュアンスの違いがあるとすれば、「手前」は主体の動態が描かれるのに対して、「ばかりに」は事態の推移に視点が置かれる。その意味で、「手前」のほうが「ばかりに」よりも主観性の高さが際立っているといえよう。

『大辞林』(三省堂1988)の「ばかりに」の説明に、「だけに」「ために」とあるが、とくに「だけに」との単純な言い換えには無理がある。

44) 彼は外国人である{ばかりに/?だけに}、会社の正社員になれずにいる。

45) お金がない{ばかりに/?だけに}、仕方なしに安アパートに住んでいる。

「だけに」には「ばかり」とくらべた場合、評価的な内容、主体への積極的な働きかけの内容が続きやすい。

46) a. 忠告をしたばかりに、プレッシャーを与えることになった。

b. 忠告をしただけに、相手に恥かしい行為は見せられない。

42) f. のような「～たいばかりに」の場合は、「ばかり」の意味は「一心」をあらわし、ほかの用例に見られる「ばかり」と性格を異にする。注意しなければならないのは名詞接続で、「外国人のばかりに」は非用で、「外国人であるばかりに」のようにあらわされる。

「ばかりに」は前文に「ながら」「のに」のような節を受けながら展開する言

い方においても特徴的である。

47) いかに学歴ではなくて実力だと一人力んでみたところで、実力がありながら学歴がないばかりに不遇をかこつ者がいかに多いかは、歴然としている。(自己抑制と自己表現)

「しなくてもよいのにあえて無理をする」という意味の副詞「なまじ」は「うっかり」「つい」と同様に、十分な成果が期待できる保証が確かではないのに何かを取ってするという、「ばかりに」の心的状況を誘導するうえで有効な共起成分となる。<sup>注3)</sup>

- 48) a. なまじ英語ができるばかりに、よく翻訳を頼まれる。  
b. なまじっか彼を信用したばかりに、痛い目にあった。

## 7. 「からには/からは」「以上は」「うえは」

「からには」は夕形接続の既然系とル形接続の未然系がみられる。話し手の意志、積極性が強く打ち出されることから、働きかけ文になる点でこれまでとりあげた文型と異なりを見せている。主文にも「わけにはいかない」「なければならぬ」などの主観性の強い断定表現があらわれる。

- 49) a. 聞いたからには黙って見ているわけにはいかない。  
b. 教師であるからには、これくらいのことを知っていなくてどうする。  
c. 約束したからには、最後まで責任をもつてやってほしい。  
d. 引き受けたからには、責任をもつべきです。  
e. 日本に来たからには、日本の法律に従わざるを得ない。  
g. 日本へ行くからには、是非とも学位をとつて帰りたい。

もうひとつの「からには」には「仮にも」という副詞との共起がしばしばみられる。主文には当然なされるべき断定的事態がもたらされる。

- 50) a. かりにも一国を代表する首相であるからには、下手な外交は許されないはずだ。  
b. かりにも大人であるからには、常識をわきまえなければならぬ。

「からには」は条件節「なら」との類似が認められる。

51) a. かりにも大学生なら、このくらいの漢字は読めるだろう。

b. かりにも語学を勉強しようというのなら、辞書くらいは用意すべきだ。

「からは」は文語的な響きがあるが、「からには」と同じ意味を表す。

52) 明日は東京に出て行くからは、何が何でも勝たねばならぬ。

(村田秀雄「王将」)

「以上 (は)」は絶対的な前提を意味する。後件を拘束する点では共通している。

53) a. 契約書に書かれている以上、期日までに完成させる必要がある。

b. 親子である以上、お互いの生活に無関心ではいられない。

c. 約束した以上、裏切ることはできません。

d. いったん始めた以上、最後までやりぬきなさい。

「以上は」は「限りにおいて」「前件が後件につながる」という意味において、既定条件の「ては」との連続性が見られる。

54) 相手のやり方が誠実である以上、文句はつけられない。

⇒相手のやり方が誠実であっては、文句はつけられない。

(相手のやり方が誠実であってみれば、文句はつけられない。

「うえは」も「以上」とほぼ同じ要件を導くが、ややあらたまった表現である。<sup>注4)</sup> 夕形接続の場合は既定条件をあらわす。

55) a. 契約を結ぶうえは、条件を慎重に検討すべきだ。(仮定条件)

b. 弁護士になると決めたうえは、苦しくてもがんばるだけです。

(既定条件)

「からには」「からは」「以上」「うえは」の一群に共通して見られる特徴は、主文における主体の覚悟、責任遂行の意志・義務、依頼・勧告・命令、当為(疑問文は不可)などの働きかけが濃厚である点である。

## 8. おわりに

以上、いくつかの文型をみてきたが、前件よりもむしろ出現する後件の新事態の結果にウエイトが置かれ、その適否、プラス価値かマイナス価値かの判断、評価を示唆する内容が差出されるという共通点があった。そこには、主体の心



的姿勢とともに、話し手の評価、主観性のありかたがどのように投影されるかという視点が介在していることを議論した。以上の観察を図に示すと次のようになるかと思われる。

**A類** ...結果、...すえ(に)、...あげく(に) ... 主観性小  
; 客観事実関係を重視

**結果誘導節** **B類** ...あまり、...手前、...ばかりに ... 主観性中  
; 主体の立場、内面を重視、釈明、弁明

**C類** ...からには/からは、...以上、...うへは ... 主観性大  
; 主体の意志を重視、働きかけ大

また、これらの類型は語用論的に話し手の主体に代わって釈明や弁明を果たすといった語用論的な言語行為がしばしば見られることは注意すべきことである。複文の運用においては、母語話者にとっては無意識に後件内容との整合が実行されているが、日本語教育のなかでは類意表現として指導する必要も生じる。本稿で示したいくつかの分析の視点は、文章表現、口頭表現の指導においても重要であるように思われる。

#### 注記)

- 1) 寺村(1981)の第18章など。なお田中(1990)では内容節を主観的な接続機能から分析した。
- 2) ただし「手術の結果」などは二義性をもつ。
- 3) 「ばかりに」には「だけに」との類似点が見られる。
  - a. なまじ知っているばかりにめったな口はきけない。
  - b. なまじ知っているだけにめったな口はきけない。
  - a. 英語ができるばかりに、よく翻訳を頼まれる。
  - b. 英語ができるだけに、よく翻訳を頼まれる。

「ばかりに」においてあらわされる心的負担は「だけに」よりも大きい。「だけに」は心理面よりはむしろ事態の趨勢をあらわす点に重点がおかれる。なお、「だけに」には「だけあって」がもうひとつの主観の対極にある。宮島・仁田(1998)ど。本稿では「だけ」と「ばかり」の対照分析についてはこれ以上、立ち入らない。

- 4) 「うえは」については田中(1999)を参照。また、「ては」構文の比較的詳細な検討は田中(2000)を参照。

### 【参考文献】

砂川有里子他(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

田中 寛(1984)「条件表現の提題的機能」『日本語教育』57号 日本語教育学会

田中 寛(1990)「モーダルな名詞成分—その接続性と文末性—」『日本語学科年報』12号 東京外国語大学日本語学科研究室

田中 寛(1999)「形式名詞〈ウエ〉の接続成分」『語学教育研究論叢』15号

田中 寛(2000)「テハ構文の談話的な機能」『紀要』8 早稲田大学日本語研究教育センター

寺村秀夫(1981)「日本語の文法」(下) 国立国語研究所

益岡隆志・田窪行則(1991)『基礎日本語文法』(改訂版) くろしお出版

宮島達夫・仁田義雄編(1998)『日本語類義表現の文法』(下) くろしお出版